林原美術館蔵『射山百首和謌』翻刻

―式子・讃岐・小侍従・丹後・俊成・生蓮・寂蓮―

北原沙友里
原　豊二
山崎桂子

解説

本稿は、『内海文化研究紀要』第四十六号に掲載された「林原美術館蔵『射山百首和謌』―守覚・慈円・静空」の続稿であり、『正治初度百首』の異本である『射山百首和謌』（岡山市林原美術館蔵）所収の百首歌のうち、残り七名の百首歌の翻刻を行ったものである。

本研究は、三人の共同研究であり、翻刻の担当は、以下の通りである。

式子内親王[1]　原
讃岐・小侍従・丹後　山崎
守覚法親王・慈円・静空　北原（第四十六号掲載）
俊成・生蓮・寂蓮　原

翻刻の際には、広島大学の妹尾好信先生に多くの御助言をいただいた。また、『射山百首和謌』については、山崎桂子「『正治初度百首』再考――新出「射山百首和歌」（林原美術館蔵）より――」（『国語と国文学』第九十六巻二号、二〇一九年二月）において、新たに考察されていることを併せて記しておく。

なお、本研究は公益財団法人両備檉園記念財団の平成三十年度研究助成金を受けており、本稿はその成果の一部である。

書陵部本との主な異同

前回同様、今回翻刻した七名についても、書陵部本『正治初度百首』を対校に用い、異同を併記している。以下に両者の主な異同を列挙しておく。

まず、部立に関しては「羈旅」に目立った異同が見られる。部立名が、式子内親王の百首歌では「旅宿」、丹後の百首歌では「旅」となっている。また、部立順も生蓮・寂蓮・小侍従は羈旅と山家の位置が書陵部本と入れ替わっていることが指摘できる。

次に、歌順に目を向けてみると、大幅な違いが讃岐・生蓮の百首歌に看取できる。具体的には、讃岐の冬064～070が、書陵部本では065・068・069・070・064・066・067に、生蓮の夏029～035が、書陵部本では033・035・029・030・031・032・034に、祝097～100が、書陵部本では099・100・097・098となっている。

また、俊成の083は、『射山百首和謌』では羈旅の三首目に置かれているが、書陵部本では羈旅の最後に、『射山百首和謌』では鳥の二首目に置かれている092が、書陵部本では鳥の最後に置かれているという違いもある。

歌順の違いは他に、書陵部本と前後逆になっているものも散見され、例えば、讃岐の夏034・035や小侍従の秋048・049がそれに該当する[2]。このような例が、他に小侍従に一例（祝096・097）、俊成に二例（春015・

016、夏032・033)、見られた。

本文の異同については、全体として助詞の違いなど細かな異同が散見される他、歌意がまったく異なるものもある。例えば、

露のいろも秋ちかしとやさよ更てまかきの荻のおとろかすらん
(『射山百首和謌』・式子034)

月の色も秋ちかしとやさよふけてまかきの荻のおとろかすらん
(書陵部本・237・式子)

かりそめとおもふ旅ねのさゝのいほによるやなからんつゆのをきそふ
(『射山百首和謌』・俊成083)

かりそめとおもひなせとも篠のいほもよやなかゝ覧露の置そふ
(書陵部本・1188・俊成)

などである。このような異同は、歌人の偏りなく全体的に見られ、該当歌の解釈に大きな影響を及ぼすものと思われる。

さらに、歌意に照らし合わせると『射山百首和謌』の本文の方がよりふさわしいと思われる歌もある。以下に抜粋する。

をのつからなからへは猶いく度かとしをむかへてあはれと思はん
(『射山百首和謌』・式子070)

をのつからなからへは猶いく度かおいをむかへてあはれと思はん
(書陵部本・273・式子)

うちはらひをのゝ浅茅にかる草のしけみかすゑにうつらなくなり
(『射山百首和謌』・式子095)

うちはらひをのゝあさちにかる草のしけみか末にうつらたつ也
(書陵部本・298・式子)

よふことりなくねそいとゝあはれなるはゝそのもりのくれかたの空
(『射山百首和謌』・讃岐017)

よふこ鳥なくねそいとゝあはれなるはゝその杜のあけかたの空
(書陵部本・1920・讃岐)

ゆくすゑにしら玉つはきはかへしてなをもをよはぬ君かみよかな
(『射山百首和謌』・讃岐097)

ゆくすゑはしら玉つはきしるへして猶もをよはぬ君か御代かな
(書陵部本・2000・讃岐)

さらぬたに木曽のかけちはあやうきにいかにたはしるあらしなるらん
(『射山百首和謌』・小侍従058)(3)

おみなへししほれふすのゝふちはかまたかぬきかけし露のなこりそ
(『射山百首和謌』・丹後041)

女郎花しほれふす野の藤はかまたかぬき置し露の名残そ
(書陵部本・2143・丹後)

かくしつゝふりゆく身こそかなしけれとしはくれてもたちかへるなり
(『射山百首和謌』・丹後070)

かくしつゝふけ行身こそかなしけれ年は暮ても立帰るなり
(書陵部本・2172・丹後)

あまつちのさかへますへき君か世をつたへてきくもうれしかりけり
(『射山百首和謌』・生蓮099)

あめつちのさかへますへき君か代をつたへき国もうれしからすや
(書陵部本・1800・生蓮)

われも行人もかよひてうの花のかきねのうちそ隔さりける
(『射山百首和謌』・寂蓮022)

われもゆき人もかよひて卯花の垣根そなかはへたてなりける
(書陵部本・1625・寂蓮)

右に挙げた例などを中心として、歌の解釈を行っていくことも今後の課題の一つになるであろう。

翻刻

〔凡例〕

・本文では一首二行書を一行にしている。
・欠字は□で示した。
・見消記号は「ヒ」で統一し、文字の左側に付した。また、原則として見消は校異にとっていない。
・旧字等は原則通行字体に改めたが、元の字体を残した方がよいものに関してはその限りではない。
・対校には『新編国歌大観』の底本となっている宮内庁書陵部蔵本を用い、異同箇所には私に傍線を引いたが、字体や仮名遣いの違いは異同にとっていない。
・校異は各歌の後ろにつけ、先に『射山百首和謌』、後に書陵部本を示した。
・それぞれの百首には便宜上001～100までの番号を頭に振り、歌末尾に括弧して対応する『新編国歌大観』の番号を付した。
・各百首の冒頭には、詠者名を通称で示した。
・本書は寄合書で、書写者を示す朱注記があるが省略している。詳細は山崎桂子の論考でふれている。

○式子内親王

春　　前斎院式子内親王

001 峯の雪もまたふるとしの空なからかたえかすめるはるのかよひち（204）
002 山ふかみはるともしらぬ松の戸にたえ〳〵かゝるゆきの玉水（205）
003 ゆきゝえてうらめつらしきはつ草のわつかに野へもはるめきにけり（206）
校異　わつかに　はつかに
004 にほのうみや霞のうちにこく舟のまほにも春のけしきなるかな（207）
005 あし引の山のはかすむ曙にたによりいつるとりのひとこゑ（208）
006 なかめやる霞のすゑはしら雲のたなひくやまの明ほのゝそら（209）
007 袖のうへにかきねの梅はをとつれてまくらにきゆるうたゝねのゆめ（210）
008 なかめつるけふはむかしになりぬとものきはのむめはわれを忘るな（211）
009 いまさらさきぬとみえてうすくもり□にかすめるよのけしきかな（212）
校異　いまさら　いま桜
校異　□　春
010 □（ほか）つほとの心のうちに坼花をつゐによしのへうつしつる哉（213）
校異　□　ま
011 みねの雲ふもとの雪にうつもれていつれをはなとみよしのゝさと（214）
012 たかさこのおのへのさくらたつぬれはみやこのにしきいくへかさねぬ（215）
校異　かさねぬ　かすみぬ
013 とふ人もおらてをかへれうくひすのはかせもつらきやとのさくらを（216）
014 霞ゐるたかまの山のしら雲ははなかあらぬかかへるたひ人（217）
015 ゆめのうちも移ふはなに風吹てしつ心なきはるのうたゝね（218）
016 けさみれはやとのこすゑに風過てしられぬゆきのいくへともなく（219）

017 いまはたゝかせをもいはしよしの川いはこすはなのしからみもかな（220）
校異　はなの　花に

018 花はちりその色となくなかむれはむなしきそらに春雨そふる（221）
校異　花はちり　花はちりて

019 みつくきのあともとまらすみゆる哉浪と雲とにきゆるかりかね（222）

020 なきとめぬ春をうらむる鶯のなみたなるらし枝にかゝれる（223）

夏

021 さくらいろのころもにもまたわかなくにはるをのこせるやとの藤なみ（224）
校異　わかなくに　わかるゝに
校異　藤なみ　藤かな

022 まつさとをわきてもやらす郭公卯の花かきのしのひねのこゑ（225）
校異　わきてもやらす　分てやもらす
校異　花かきの　花かけの

023 ほとゝきすきゝつる雲をかたみにてやかてなかむるあり明のそら（226）
校異　きゝつる　なきつる

024 声はして雲路にむせふほとゝきす涙やそゝく夜はのむらさめ（227）
校異　夜はの　よひの

025 郭公よこ雲かすむ山のはのあり明の月になをそかたふく（228）
校異　かたふく　かたらふ

026 水くらき岩まにまよふ夏むしのともしけたてもよをあかすらん（229）
校異　まよふ　まかふ
校異　けたても　けちても
校異　あかすらん　あかすかな

027 さみたれの雲はひとつにとちはてゝぬきみたれつるのきの玉水（230）

028 いにしへをはなたち花にまかすれはのきのしのふに風かよふなり（231）

029 かへりこぬむかしを今とおもひねのゆめのまくらににほふたちはな（232）

030 まくすはらうらかせなるゝ夏のよの秋たちそむるせみの羽衣（233）
校異　夏のよの　夏の夜は

031 すゝしやとかせのたよりを尋ぬれはしけみになひく野へのさゆりは（234）

032 さよふかきいはもる水のをとさえてすゝしくなりぬうたゝねのとこ（235）
校異　さよふかき　さ夜ふかみ

033 いけさむきはすのうはゝに露はゐぬ野へにいろなる玉やしくらん（236）
校異　うはゝに　うき葉に

034 露のいろも秋ちかしとやさよ更てまかきの荻のおとろかすらん（237）
校異　露　月

035 秋かせをかりにやつくるゆふくれの雲ちかきまてゆくほたるかな（238）
校異　秋かせを　あき風と

秋

036 うたゝねのあさけの袖にかはるなりならすあふきの秋のはつかせ（239）
校異　あさけの袖　あさけの風

037 なかむれは木のまうつろふ夕月夜やゝけしきたつ秋のそらかな（240）

038 日くらしのこゑもつきぬる山陰にまたおとろかす入あひのかね（241）

039 あともなき庭の浅ちにむすほゝれ露のそこなる松むしのこゑ（242）

040 わかゝとのいなはの風におとろけはきりのあなたにはつかりのこゑ（243）

041 かせかへる浪の花すり乱つゝしとろにうつすまのゝ浦はき（244）
校異　かせかへる　よせかへる

042 しら露のいろとる木々のをそけれと萩のした葉そ秋をしりける（245）
校異　木々の　木々は

043 秋といへはものをそ思ふ山のはにいさよふ雲のゆふくれの空（246）

044 はなすゝきまた露ふかしほに出てなかめしと思秋のさかりを（247）

045 かり衣みたれにけらし朝露（りなイ）（アツサ弓イ）にひくまのゝ辺にはきの下露（道イ）（248）
校異　けらし朝露（アツサ弓イ）に　けらしあつさ弓

046 萩のうへにかりの涙の置露はこほりにけりな月にむすひて（249）
047 なかめわひぬ秋よりほかの宿も哉野にもやまにも月やすむらん（250）
048 更にけり山のはちかく月さえてとをちのさとに衣うつなり（251）
校異　うつなり　うつこゑ
049 故郷はむくらのゝきもうらかれてくまなくはるゝ月のかけかな（252）
校異　くまなく　よなく
050 とけてねぬ袖さへ色に出ねとや露ふきむすふ峯のこからし（253）
051 しるきかな浅茅色つく庭の面に人めかるへき冬のちかさは（254）
052 秋の色はまかきにうとく成行とたまくらなるゝねやの月かけ（255）
校異　たまくらなるゝ　枕になるゝ
053 あさち原はつしもむすふ長月のあり明の空におもひきえつゝ（256）
054 梧の葉もふみ分かたく成にけりかならす人をまつとなけれと（257）
055 おもへともこよひはかりは秋の空ふけゆく雲に打しくれつゝ（258）
校異　こよひはかりは　こよひはかりの

冬

056 神な月みむろの山の山風にくれなゐくゝるたつたかはかな（259）
057 こすゑには残るにしきもとまりけり庭にそ秋のいろはたちける（260）
058 みるまゝに冬はきにけりかものゐる入江のみきはうす氷して（261）
校異　うす氷して　うすごほりつゝ
059 時雨つゝよもの紅葉はふりはてゝあられそおつる庭のこのはに（262）
060 あれくらす冬の空かなかきくもりみそれよこきる風きほひつゝ（263）
061 あしかものはらひもあへぬしもの上にくたけてかゝるうす氷かな（264）
062 あられふる野ちのさゝはらふし侘てさらに宮こをゆめにたにみす（265）
校異　さゝはら　しの原
063 さむしろのよはの衣手さえ〳〵てはつ雪しろしおかのへの松（266）
校異　よはの　夜は
064 むれてたつそらも雪けにさはかれてこほりのとこやをしそ鳴なる（267）
校異　さはかれて　寒くれて
065 身にしむは庭火のかけもさえのほるしも夜のほしの明かたの空（268）
校異　こほりのとこや　氷のねやに
066 あまつ風こほりをわたる冬のよのおとめの袖をみかく月かけ（269）
067 日かすふる雪けにまさるすみかまのけふりもさむしおほ原のさと（270）
校異　さむし　さひし
068 わたの原ふかくや冬のなりぬらんこほりそつなくあまのつり舟（271）
069 人とはぬ都のほかのすまひにもはるはとなりにちかつきにけり（272）
校異　すまひにも　雪の中も
070 をのつからなからへは猶いく度かとしをむかへてあはれと思はん（273）
校異　としを　おいを

恋

071 しるへせよあとなき浪にこく舟のゆくゑもしらぬやへのしほ風（274）
072 かくとたにいはかきぬまの身をつくしる人なみにくつる袖かな（275）
073 ゆめにてもみゆらん物をなけきつゝうちぬるよひの袖のけしきは（276）
074 わか恋はしる人もなしせくとこのなみたもらすなつけのをまくら（277）
075 しらせはやすかたの池の花かつみかつみるまゝになみのしほると（278）
校異　なみのしほると　浪にしほるゝ
076 わきもこか玉ものすそによる波のよるとはなしにほさぬ袖かな（279）
077 あふことはとをつのはまの岩つゝしいはてやくちんそむる心を（280）
078 わか袖はかりにもひめやくれなゐのあさはのゝらにかゝるゆふつゆ（281）
079 あふことはけふ松かえのたむけ草いくよしほるゝ袖とかはみる（282）
校異　袖とかはみる　袖とかはしる
080 まちいてゝもいかになかめん忘れねといひしはかりの有明の月（283）
校異　忘れねと　わするなと
校異　有明の月　有明の空

旅宿

081 都にて雪まはつかにもえいてし夢引むすふさよの中山（284）
校異　旅宿　羈旅

082 あらいその玉ものとこにかりねしてわれからそてをぬらしつる哉（285）
083 宮こ人おき津こしまの濱ひさしひさしくなりぬ浪ちへたてゝ（286）
084 行すゑはいまいくよとかいはしろのをかのかやねに枕むすはん（287）
085 松かねのをしまか磯のさよ枕いたくなぬれそあまの袖かは（288）
校異　をしまか磯の　としまか磯の

山家

086 我かやとはつま木こりゆく山かつのしはくかよふみちはかりして（289）
087 今はわれ松のはしらの枕の庵にとつへきものをこけふかき袖（290）
088 山さとは峯の木の葉にきほひつゝ雲よりおろすさをしかのこゑ（291）
校異　山さとは　山のはゝ
089 柴の戸を人こそとはねあし曳のやまよりいつる月はまちみつ（292）
校異　月はまちみつ　月はまつみつ
090 山さとは峯にたえせぬ松のこゑこの葉にしのふ谷のした水（293）

鳥

091 暁のゆふつけとりそあはれなるなかきねふりをおもふまくらに（294）
校異　まくらに　涙に
092 なくつるのおもふ心はしらねともよるのこゑこそ身にはしみけれ（295）
093 身のうさをおもひくたけはしのゝめのきりまにむすふしきのはねかき（296）
校異　むすふ　むせふ
094 いかなしや風にたゝよふ浪のうへにほのうきすのさてもよにふる（297）
校異　いかなしや　はかなしや
校異　よにふる　よをふる
095 うちはらひをのゝ浅茅にかる草のしけみかすゑにうつらなくなり（298）
校異　なくなり　たつ也

祝

096 君がへんちよ松風にふきそへて竹もしらふる声かよふなり（299）
097 あめのしためくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御代の末く（300）
098 いくとせのいくよろつ世か君かよに雪月花のともを待見む（301）
校異　待見む　まちけん
099 かめのおのいはねかうへにゐるたつのこゝろしてける水のいろかな（302）
校異　ゐるたつの　ゐるたつも
100 君か代はちくまの川のさゝれ石のこけむすいはとなりつくすまて（303）

〇二條院讃岐

春

二條院讃岐

001 いはそゝくたるひのをとにしるき哉こほりとけゆく春のはつ風（1904）
校異　たるひ　たるみ
002 うくひすの谷のふるすをとなりにてともにまちつるはるはきにけり（1905）
003 やまさとのかきねにこむる小松原野辺にもいてぬねの日をそする（1906）
004 わかなゆへひとつ雪まにたつね来てちきらぬともにつるゝけふかな（1907）
校異　つるゝ　なるゝ
005 山のはにゆきけの雲のはれぬれはかすみにくもる春のよの月（1908）
006 をしなへてかすめる花とみゆるかなふしのしらねのはるの曙（1909）
校異　ふし　こし
007 にほひくるのきはの梅のうつりかにむかしおほゆるすみそめの袖（1910）
008 たちそめし野への霞のあさみとりはるとゝもにやふかくなるらむ（1911）
009 うくひすのこほれるなみたとけぬれははなのうへにや露とをくらん（1912）
010 くもりなき池に移れる青柳のみとりのそらにあそふいとゆふ（1913）
校異　青柳の　青柳や
011 秋かせのいなはの露を契をきてたのむのかりもたちかへる覧（1914）
校異　露　音

012 おもひやるはるのねさめのとこなからよもの山への花をみるかな（1915）
校異　覧　なり
013 枝かはす松にちきりをむすひ置てはなもときはに坼かはれかし（1916）
014 ふく風ものとけき御代の杢（はる）にてそさきけるはなのかきりをもしる（1917）
校異　杢　春
015 校異　かきり　さかり
ちらぬまに今ひとたひと契れ共はなにまかせぬ春の山かせ（1918）
016 校異　契れ　契る
山たかみ峯のあらしに散はなのつきにあまきる明かたの空（1919）
017 よふことりなくねそいとゝあはれなるはゝそのもりのくれかたの空（1920）
校異　くれかた　あけかた
018 吉野かはさくらなかれし浪の上にあらぬいろなる山ふきのはな（1921）
019 さきかゝる松のこかけにたちよれはおらてもちるをかさしつるかな（1922）
校異　ちる　藤
020 春はなをゆくゑも知すかへるらんとしはわか身にとまりしものを（1923）
校異　春はなを　春もなと
校異　知す　しらて

夏

021 草も木も花の袂はかへてけり□□□□山もふるみとりなり（1924）
校異　袂は　袂も
校異　□□□□山　今朝は野山
校異　ふるみとりなり　深緑なる
022 郭公いつるつはさに雨ちりてしのひねよりやしほれそめ釼（1925）
023 たちはなの花散さとにすまゐしてむかしを忍ふ露そひまなき（1926）
校異　むかしを忍ふ　昔忍の
024 ほとゝきすまたすといかてきかれましつれをうらみてなくよありやと（1927）
校異　つれ　我
025 あやめふくのきは涼しきゆふかせに山ほとゝきすちかくなくなり（1928）
026 五月雨にきしの松かけみつみちてみきはそせはき広沢のいけ（1929）
校異　松かけみつみちて　松かえ水（ねイ歟）こえて
027 在明の月よりにしのほとゝきすわかおもふかたになきわたる也（1930）
校異　也　かな
028 ともしするころにしなれはつくは山このもかのもそあらはなりける（1931）
029 よもすから草葉につたふ蛍こそかせにこほれぬ露とみえけれ（1932）
030 ませのうちにつゆもはらはぬとこ夏のたまをかされるにしきなるらん（1933）
校異　とこ夏の　とこ夏や
031 秋といへはくれなゐくゝる龍田川夏はみとりのいろそみえける（1934）
032 またしらぬ衣の玉のおもかけにこゝろにかゝるはちす葉の露（1935）
校異　おもかけに　面影も
033 校異　かゝる　かくる
しめはゆるきねかそともの柴のとにまたさきかゝるゆふかほの花（1936）
034 校異　はゆる　はふる
なくせみのこゑも涼しき夕くれに秋をかけたる杜のしたつゆ（1937）
035 みそき河いせきの音のすゝしきは秋よりさきに浪やこゆらん（1938）

秋

036 今よりの秋のねさめをいかにせんおきの葉ならてたれかとふ覧（1939）
校異　いかにせん　いかゝとも
校異　とふ覧　問へき
037 たなはたの恋のけふりやはれぬらんあきのこよひのあまのかはかせ（1940）
038 そのことゝさしておもはぬ袖のうへもけにあやしきは秋のゆふくれ（1941）
校異　うへも　上に

校異　ゆふくれ　夕露

039 おきてみるものともしらて朝ことに草葉の露をはらふ秋風（1942）

校異　朝ことに　朝ことの

040 かせわたるおはなか末にちるつゆをなみにくたくる玉かとそ見る（1943）

校異　末に　上に

041 こゝろにはうつらぬ花もなけれとも袖にみゆるやはきか花すり（1944）

042 なくしかに声うちそふる高砂のおのへのまつもつまやこふらん（1945）

043 なか〳〵にこゝろなくても過ぬへしみつのゝさとの秋のくれかた（1946）

校異　過ぬ　すみぬ

校異　みつのゝ　深山の

044 たまつさをいかなるさとにつたふらんあきをわすれぬはつかりの声（1947）

045 ふきをくる風のたえまはよはるなりまかきのゝへのむしのこゑ〳〵（1948）

046 秋のよはたつぬるやとに人もなしたれも月にやあくかれぬらん（1949）

047 むかし見し雲ゐをめくる秋の月いまいくとせかそてにやとらん（1950）

校異　やとらん　やとさん

048 なかむへき浪の花をもこめてけりまかきのしまの秋の夕霧（1951）

校異　まかきの　籬か

049 たひねするやまたの庵はよさむにていなはのかせにころもうつなり（1952）

050 ちりかゝる紅葉の色はふかけれとわたれはにこる山川の水（1953）

051 さま〳〵に野辺のちくさもひをへつゝひとついろにそしもかれにける（1954）

校異　さま〳〵に　さま〳〵の

052 うへてみるこゝろもちらすわかやとにたゝひともとのしらきくの花（1955）

053 山たかみ杜のした草うらかれてこゝにすさむひくらしのこゑ（1956）

校異　山たかみ　秋ふかみ

054 長月のありあけの月も更にけりわかよのすゑをおもふのみかは（1957）

055 くれてゆく秋もやしはしやすらふとかせたにかよへ浪のかよひち（1958）

校異　かせたにかよへ　風立むかへ

冬

056 おほかたもこけの袂はうすけれと冬をしらする山下風のかせ（1959）

057 おもかけに秋のなこりをとゝめ置てしものまかきに花をみるかな（1960）

058 かれにけりうつらとともに住なれしあしのまろやのうちもあらはに（1961）

059 はなれたるおきのこしまの梢までわたりてそむるはつしくれかな（1962）

060 あやなくもをとをしくれにかりなからくもらぬそらにふる木の葉かな（1963）

061 浅茅はら庭にひかけのさすまゝにしもは露にそきえかへりける（1964）

校異　かへりける　かはりぬる

062 めつらしく雪まにみえしわかくさの霜かれはつる冬も来にけり（1965）

校異　冬も　冬は

063 梶まくら玉もかたしくうたゝねにとまやかのきにちとりなくなり（1966）

校異　梶まくら　かり枕

064 降雪にをのかなさけをみせかほにふゆのさとゝふをのゝ山人（1971）

065 ちとりなくそかのかは風身にしみてますけかたしきあかすよは哉（1967）

066 まとひするよはのうつみ火かきのけて春より冬にまたかへりぬる（1972）

067 くれはつるとしのつもりをかそふれはむそちの春もちかつきにけり（1973）

068 池水にあられふるよはをし鳥のかつかぬなみに玉やをくらん（1968）

校異　をくらん　ちるらむ

069 なにはかたみきはのかせもさえぬれはこほりにつなくなたのすて舟（1969）

校異　こほりに　氷そ

070 ふる雪に峯の煙はのこれともふしのなるさは氷しにけり（1970）

校異　氷しにけり　氷ゐにけり

恋

071 我か袖やみるめなきさのいはならんむなしき浪のかけぬまそなき（1974）
072 いかにせむうきもつらきも契そとしらぬむかしになくさむるかな（1975）
073 ものおもふこゝろに秋やふけぬらんいろになりてもちる涙かな（1956）
074 いてゝゆくあともさなからまつものをたかゝよひちとおもひなすらん（1977）
075 をのつからいつかあふせにかはるへきなみたのふちそつれなかりける（1978）
076 おりこそあれなかめにかゝるうき雲の袖もひとつに打しくれつゝ（1979）
077 露しくれひとつにしほる山人のあさのたもともかくはぬれしを（1980）
078 つゆけさはをきわかるらむとこよりもなかめわひぬるあけかたの空（1981）
079 なみたかはたきつこゝろのはやきせをしからみかけてせく袖そなき（1982）
080 するかなるふしの煙のたゝぬ日はあれともむねははれしとそ思（1983）

羈旅

081 都いてゝかさなる山にたつ雲のへたつる中をなをへたつらし（1984）
校異　たつ雲　ゐる雲
校異　へたつらし　へたつらん
082 よそに見し浪のうへにもとこなれぬいくよあかしのうきねなるらん（1985）
083 たひねするすまのうらちのとまやかたをとせぬなみも袖にかけゝり（1986）
084 ゆきとまりをやかりふく旅のいほに吹なみたりそ野へのゆふ風（1987）
校異　ゆきとまりをやかりふく　ゆきとまるをかやかりしく
校異　いほに　庵を
085 草枕露をきなからたちぬれはまたこむ人やあはれかくへき（1988）

山家

086 都いてゝふかく入にしおく山になをのこりけるゆめのかよひち（1989）
087 をのつからあたりにたつる煙こそしはのいほりの友となりけり（1990）
校異　なりけり　なりけれ
088 山さとは野はらにつゝく庭の面にうへぬ籬の花をみるかな（1991）
089 のきちかき秋のを山田かりにたにおもひきや□□かゝるすまゐを（1992）
校異　おもひきや□□　思ひかけきや
090 妻木こるわかゝよひちのほかに又人もとひこぬたにの岩はし（1993）

鳥

091 今はとて沢辺にかへるあしたつのなをたちいつる和歌のうら浪（1994）
092 をのつからたちよる方も渚なるにほのうきすのうき身成けり（1995）
093 いとひけむむかし思そあはれなるゆふつけとりにめをさましつゝ（1996）
094 呉竹にねくらあらそふむらすゝめそれのみ友ときくそさひしき（1997）
095 とるかたもなき身なからにはしたかのすゝろに世をもすてやらぬかな（1998）
校異　世をも　身をも

祝

096 あまのはらゆくすゑとをき雲の上に月ものとけき君か御代かな（1999）
097 ゆくすゑにしら玉つはきはかへしてなをもをよはぬ君かみよかな（2000）
校異　ゆくすゑに　ゆくすゑは
校異　はかへして　しるへして
098 わたつうみによせてはかへるしき浪のかすかきりなき君か御代かな（2001）
099 ゆく河の水のみとりのすゑまてもなかれたえせぬ君かみ世かな（2002）
校異　ゆく河　たけ川
100 霜をけと色もかはらぬさかき葉のさしてもしるききみか御世かな（2003）

○小侍従

春　小侍従

001 くるはるのすかたのそれとみえねともなのみやこゆるあふさかの関（2004）
校異　すかたの　すかたは
校異　こゆる　こふる
002 三輪の山たつねし枚はとしふりてはるのしるしに松たてりけり（2005）
校異　しるしに　しるしの
校異　たてりけり　たてゝけり
003 朝日山いつしか春のけしきにてかすみをなかす宇治の川なみ（2006）
004 よそにてや霞と見まし吉野山峯にいほりをむすはさりせは（2007）
校異　霞と　かすむと
005 はるくれはふもとめくりの霞こそおひとはみゆれきひの中山（2008）
006 うくひすの谷のふるすのとなりにてまたかたことのはつねをそきく（2009）
007 はつ春の草のはしめにつむとてやわかなといひてとしのへぬらん（2010）
校異　はしめに　はつかに
008 きゝをきしそのかたみにはあらねともせりつむそてはたゝもぬれけり（2011）
009 君が代のあまねき雨やこれならんめくみわたらぬ草の葉もなし（2012）
010 いつかたのむめのたちえに風過ておもはぬ袖にかをとゝむらん（2013）
校異　風過て　風ふれて
011 かしかましぬしある野へのさわらひのおらはほとろにちりもこそすれ（2014）
校異　さわらひの　さわらひを
校異　ほとろにちりも　ほとろと成も
012 さきそめし花やさかりに成ぬらん雲にいろそふみよしのゝ山（2015）
013 歳経たる花にとはゝやかく斗のとけき御世のかせやありしと（2016）
014 むかしみし吉野の山はことふりて花はいろこそさかりなりける（2017）
校異　ことふりて　年ふりて
校異　いろこそ　都そ
015 ねやまもるしつかゝきねのたひ枕さてものとかに花をたにみむ（2018）
校異　ねやまもるしつかゝきねの　ねやまこるしつかかりねに
校異　みむ　みは
016 みわたせはまた草たゝぬ春のゝにおもひあかるやひはりなるらむ（2019）
校異　ひはりなるらむ　ひはりけのこま
017 なつかしきつまもこもれり同しくはこゝのへにてやすみれつまゝし（2020）
校異　ひもれり　こもりき
校異　こゝのへ　この野へ
018 住よしの浅沢をのゝかきつはたきぬにそすえん人もさそせし（2021）
校異　をのゝ　をのに
019 校異　きぬにそすえん　衣におすらん
020 坼かゝるしつえは浪のあらへともなを色ふかしたこの浦藤（2022）
さりともととしをたのみしむかしたにはるのくるゝはおしからぬかは（2023）

夏

021 夏くれは心はかりのいつのまにはなにいとひし風をまつらん（2024）
校異　心はかり　心かはり
022 ひかけさす卯花山のをみ衣たれぬきかけて神まつるらん（2025）
023 郭公いつくをやとゝさためてかあやなきやみになきて過ぬる（2026）
校異　やとゝ　かとゝ
校異　あやなき　あめふる
024 ひとこゑに雲ち過ぬる郭公またいつかたの人さはくらん（2027）
025 ねらひするほくしのかけにさをしかのうらなくなにかめをあはすらん（2028）
026 おりたちてつむへきなきのはもみえすた中のゐとの五月雨の比（2029）
027 さみたれの日をふるまゝにかはり行つたの入江の身をつくしかな（2030）

028 五月雨に庭のよもきや朽ぬらんすたくほたるのかすそひにけり（2031）
029 ふきゝつる花橘の身にしめはわれもむかしの袖のかやする（2032）
030 さきにけりをちかた人にことゝひてなをしりそめし夕かほの花（2033）
031 このさとはすきぬとみゆるゆふたちのほかになりゆくかたをしそ思（2034）
032 うかひ舟月をいとふにしるきかなこむよのやみにまよふへしとは（2035）
033 いかて我ねかふはちすの身となりてはなになるてふゆめをさまさん（2036）
034 さのみやは山井のし水すゝしとてかへさもしらぬ日をくらすへき（2037）
校異　しらぬ　しらす
035 わきもこかぬかつくかみもなひくなりこれやみそきのしるしなる覧（2038）
校異　ぬかつく　すかぬく
校異　なり　めり

秋

036 夜のほとにかたえ涼しきかせのきてあきになりゆく荻のうは風（2039）
校異　かせのきて　風吹て
校異　うは風　音かな
037 まれにあふ秋のなぬかのくれはとりあやなくいかにあけぬこのよは（2040）
038 いかにせむあまの川風身にしみてうらみをのこす明暮の空（2041）
039 わきかねしおなしみとりの夏草のはなにあらはす秋のゆふくれ（2042）
校異　夏草の　夏草を
040 たはるれとをしてそかへる女郎花うき名をえたるつみのふかさよ（2043）
校異　をしてそかへる　おらてそ過る
校異　うき名　うきみ
校異　ふかさよ　ふかさに
041 きゝをきしなをあたしのゝしのすゝきいつなれかほにまねくけしきそ（2044）

042 そよといふおきのはかせに人ならはおなし心のともとみてまし（2045）
043 こしちよりその玉つさはかけねともくるかりかねのかすそよまるゝ（2046）
044 契てもよかれやすらんさをしかのうらみかほなるこゑきこゆなり（2047）
045 草むすふたひねのゆめのさむるまにおりあはれなるさをしかのこゑ（2048）
046 白露やわかそめかほにおもふらんちくさのはなの色をうつして（2049）
047 舟よはふよとのわたりの朝霧にのりをくれたるみつのさと人（2050）
048 あたにをく露にぬれたるあさかほのかたくよをやおもひしるらん（2052）
校異　あさかほの　槿は
049 月のころやそちの秋をみぬはなしおほえぬものをかゝるひかりは（2051）
050 なにことに露も心のとまらまし月をなかめぬこのよなりせは（2053）
051 なかめてもたれをかまたむ月よゝしよゝしとつけし人もなけれは（2054）
校異　つけし人も　つけん人し
052 終夜つきをなかむるうたゝねのこゝろのうちをしる人もかな（2055）
053 散なましおりうれしくそみにきけるもみちのにしきかせたゝぬまに（2056）
054 あきはつるかれのゝ草のした葉にはさもよはるへしむしのこゑ〳〵（2057）
055 いかにせむすき行秋の日数へてこよひにかきるゆふくれの空（2058）

冬

056 おちつもる楢のかし葉にふく風のをとにそしるき冬のけしきは（2059）
校異　かし葉　かれ葉
校異　風の　風は
057 よかれせすをとつれわたる時雨かなそらたのめする人もあるよに（2060）
058 さらぬたに木曽のかけちはあやうきにいかにたはしるあらしなるらん
校異　この歌書陵部本になし

059 雲かゝるひらのたかねにふゝきしてさゝ浪よするまのゝうら松（2061）
060 すみよしと昔いひけるなにはえにまたわひ人のあしかるやたれ（2062）
061 はまきよきゆらのみなとに鳴ちとりよふねやのほるたちさはくなり（2063）
校異　みなとに　みなとて

062 住なれしいけは氷にとちられてゐもさたまらぬあちむらの鳥（2064）
校異　あちむらの鳥　あちのむら鳥

063 霜いとふとりのうは毛にくれなゐの紅葉をのこす龍たかはかな（2065）
064 こやの池にやとりし月はさもあらてあるしかほにもゐるつらゝかな（2066）
065 さえわたる風による浪ひをなれはまつともこよひかひやなからん（2067）
校異　よる浪ひを　よるなるひほ

066 さか木とる庭火のかけにまとゐしてやそ宇治人のこゑあはすなり（2068）
067 暮ぬともはつとやしたのはしたかを一よりいかゝあはせさるへき（2069）
校異　はつとやした　はつとやたし

068 雪ふかきをのゝすみかまよそなからこゝろほそさはけふりにそしる（2070）
069 手すさみにとふはひうらのあたるまてうつめときえぬわかおもひかな（2071）
校異　手すさみ　てすさひ

校異　あたる　あたり

070 ゆくとしやうら嶋かこのはこならんあくれは老の身にとまりぬる（2072）
校異　とまりぬる　つもりぬる

恋

071 紅のこそめの衣ぬれ〳〵てくちんたもとをなにゝかこたん（2073）
072 おもひあまりあまりおもへは先の世にわかつらかりしむくひなるらん（2074）
073 つらきをも恨ぬ我にならふなようき身をしらぬ人もこそあれ（2075）

074 忘られて恋しきよりはあふことのくやしさまさるものおもひかな（2076）
校異　忘られて　わすられき

075 しのふともかひやなからんかくしつゝおつるなみたのいろかはりなは（2077）
校異　しのふとも　しのへ共

076 我こふるおりも有なむあすかゝはきのふふちはせにかはるなり（2078）
校異　我　わか

校異　きのふふちは　昨日の渕も

077 たまさかにあひ見しよにも逢と見しゆめはまことのいみけるものを（2079）
校異　よにも　夜はに

校異　まことの　まことに

078 こりつもる嘆のはてをなかむれはもゆるしおもこのよのみかは（2080）
校異　なかむれは　尋ぬれは

校異　しおも　思ひは

079 これやけにあさせをはやく行水のかすかくほとのこゝろなるらん（2081）
校異　行水の　ゆく水に

080 いかてこれゆふへの雨と身をなしてのきのしつくにものをいはせん（2082）
校異　これ　われ

山家

081 しきみつむ山ちの露にぬれにけりあかつきおきのすみそみの袖（2088）
校異　すみそみ　墨染

082 いかゝして住もはつへき雪つもるかけひの水のをともたえねは（2089）
校異　住も　すみは

校異　たえねは　絶なは

083 朝ゆふのけふり斗をあるしにて人はをとせぬおほ原の里（2090）
084 あらしふく峯のましらのなくこゑにあはれもよをすたきの音かな（2091）
校異　たきの音　たきつ音

085 くれ毎にたえす音せよおなしくはふかきやまちに入あひのかね（2092）

羈旅

086 こまなめていくのゝおくのひとさとにみゆるけふりやしるへなるらん（2083）

校異　こまなめて　駒なへて

087 むやひするしまたの舟のとまやかたいふせきことに雨さへやふる（2084）

校異　しまた　ゑなた

校異　いふせきこと　いふせき比

088 こよひもやゝとかりかねん津の国のこやとも人のいはぬわたりは（2085）

089 またよひの人におとろく鳥のねにふかくこえけるあふさかのせき（2086）

090 我はかり秋たつたひと思ふまにまついてにけり在明の月（2087）

校異　秋　朝

鳥

091 羽かはすこからめふしをみてもまつわかひとりねの契をそしる（2093）

092 ふたむらの山のこしらんしのゝめにあけぬとつくるはことりのこゑ（2094）

校異　山のこしらん　山のはしらむ

093 よそなから心そみゆる山とりのおろのはつをのかゝみならねと（2095）

校異　ならねと　ならねは

094 となくとけむゆくゑもしらぬそのにきてあたらひうちとなくやなにとり（2096）

校異　となくとけむ　とらせけん

校異　あたら　わたら

095 ことゝひしすみた川原の鳥のねはわれもこゝろにわすれもやする（2097）

校異　もやする　やはする

祝

096 幾ちよか君は見るへきあさことにけふりたえせぬ民のかまとを（2099）

097 百代まて世をまもるへきちかひにもきみをはわきてときはかきはに（2098）

098 君か世にあふみのうみをいくちたひいくたになせとさためをきけん（2100）

校異　いくち　いくそ

校異　いくたになせと　田につくれとか

099 いくちよとかきらぬ御代の数にこそたとへんことのそらにおほえね（2101）

100 君か世はにまのさと人かすふれはかすよりほかにかすそゝひける（2102）

校異　かすふれは　数ふれて

校異　かすそゝひける　かすそひにけり

○宜秋門院丹後

春　丹後

001 としはくれ雲は明行かねの音のしもは霞にきゆるなりけり（2103）

校異　雲は　春は

002 ひく人のよはひもしるしこ松はらねの日のちよを野へにいてつゝ（2104）

003 はるきては音なし川もなかりけりこほれる水のなにこそ有けれ（2105）

004 みよしのゝ花のさかりをまつほとはふもとのゝへにわかなをそつむ（2106）

005 かすみゆるさかひもみえぬ雲ち哉春のなかめのあけほのゝ空（2107）

校異　かすみゆる　霞行

006 こそなれし春のかすみをこゝそとやのきはの梅にきゐるうくひす（2108）

校異　かすみ　すみか

007 梅かえのおらぬねやまてにほひきてかたしくそてになを移ぬる（2109）

校異　梅かえ　梅か香

008 かせわたる春のゝさはのさわらひはなみにまかせてをるにそ有ける（2110）

009 はる雨のふるの小山田うちすてゝさもあらぬくさのみとりをそみる（2111）

010 玉つさをかけてはやらしかへるかりそらゆくつらにそてをまかせ

て（2112）

011 芳野山かすみのうへにゐる雲や峯のさくらのこすゑなるらん（2113）

校異　そて　筆

012 あけわたると山のさくらみわたせは雲ともわかす霞ともなし（2114）

013 花のかをひとかたならすふく風にはるの心のそらにちるかな（2115）

014 かすみとち花ちるみねの朝ほらけのちにや風のうさもしられん（2116）

校異　かすみとち　かすみつゝ

015 風をいたみいく夜あかしつ木の本にはなをたひねのひしきものにて（2117）

016 とふ人もこすゑを見てやかへるらんあはれさひしき花のにはかな（2118）

校異　さひしき花の　恋しき春の

017 うちなひき柳なみよる春の庭露をは風のはらふなりけり（2119）

018 春ふかきゐての川浪おりをえてさかりにほふやまふきのはな（2120）

校異　ふかき　ふかみ

019 はま松のすゑまてかゝるふちの花雲となみとにまかふなりけり（2121）

020 春はけふ霞の衣花のそてやとのこすゑにぬきかへてけり（2122）

校異　ぬきかへて　ぬきかけて

夏

021 けふといへはひとよのはるのへたてとやおもへはうすしせみの羽衣（2123）

022 花ちりて人も尋ぬやまかけにしけりはてぬる杜のしたくさ（2124）

023 引かへてやみにはしるき月なれやくもらはくもれ卯の花のころ（2125）

024 たより有とけふふくしつや思らんよもきのやとのゝきのあやめを（2126）

校異　よもきの　蓬か

025 むめか枝にそめしもおなし袖なれとむかしにかよふのきのたちはな（2127）

校異　むめか枝　梅か香

026 たちはなのかをとめてなく郭公やみはさつきもあやなかりけり（2128）

027 ほとゝきすたつねてきけとおもひけりみ山のおくのゆふくれのこゑ（2129）

028 五月雨はぬまの入えのみをつくしきしのひさきのこすゑなりけり（2130）

029 さみたれはふりしむれとも夏むしのおもひはきえぬものにそありける（2131）

030 あめのゝちみきはのをさゝ風ふけはつゆにたまそふいけの蓮葉（2132）

校異　をさゝ　こさゝ

031 夕たちのなこりのそらに雲はれていさよふ月に秋そほのめく（2133）

032 夏のよはやまのはいつる月かけにやかてあり明のそらをみるかな（2134）

033 たきつせのおつるいはねの夕すゝみくたくるたまや秋のしらつゆ（2135）

034 秋風をまちつるからにうつせみのなくねすゝしき杜のかけかな（2136）

校異　からに　空に

035 まちくて秋をはあすとおもふよりまつをくものは袖のしらつゆ（2137）

校異　秋をはあすと　あすをは秋と

秋

036 昨日みしまかきの荻はかはらねと秋としなれはあらぬ風かな（2138）

037 のへにいてゝかせのけしきをみぬ人はこゑはかりにや秋をしるらん（2139）

校異　こゑ　音

038 秋たちてけふみか月のかけをたにおほろけならぬ光とそみる（2140）

039 あまのかはふかき契はたのめともとたえそつらきかさゝきのはし（2141）

040 たつた山こすゑはなをもみとりにてすそのゝはきにあきをみるかな（2142）

校異　みるかな　しる哉

041 おみなへししほれふすのゝふちはかまたかぬきかけし露のなこりそ（2143）

校異　ぬきかけし　ぬき置し

042 ものことにそむるもくるし秋はきを人の心をつくすなりけり（2144）

校異　秋はきを　秋は猶

校異　なりけり　つまかな

043 またしらぬ野へにそこよひやとりぬる人まつむしのこゑをたのみて（2145）

校異　たのみて　尋て

044 おほ空に秋のあはれやしるからん月すむよはのはつかりのこゑ（2146）

045 秋の月いかなるかけをそふるそとおほろかなさのはるゝよそなき（2147）

校異　おほろかなさの　おほつかなさの

校異　よそなき　夜はかな

046 あきしらぬときはの山のふもとにはあやしかるへき月のかけかな（2148）

047 なかめやる心のはてもなきものを雲ちはるかにめくる月かけ（2149）

校異　ものを　物は

校異　めくる　すめる

048 秋のうちにこよひそ月のすまのせきなかはのかけそしはしとゝめよ（2150）

校異　こよひそ　今夜や

校異　とゝめよ　とゝめぬ

049 さらぬたに老のねさめの袖のうへは露けきものをさをしかのこゑ（2151）

050 いほりさす山ちも秋もふかきよのまきふく風にをしかなくなり（2152）

校異　まき　松

051 秋といへはいほもる賤かさむしろにいなはの露ををかぬ日そなき（2153）

校異　露を　露の

052 あちきなくわれにはうときさよ衣うつをとはかりよをやあかさん（2154）

校異　あかさん　かさねむ

053 はゝそ原また色あさき紅葉ゝやしくれまつまのつゆのした染（2155）

054 なかくにまくすかはらの風よりも紅葉にのこるうらみなりけり（2156）

055 秋のこしかたへかつらはおほえ山いくのゝ霧に道やまよはむ（2157）

校異　秋のこし　秋のくる

校異　かつらは　かへらは

校異　道やまよはむ　道まよはなん

冬

056 くれはてし秋の時雨の山めくりまたふるたひは冬のあけほの（2158）

057 いまさらにおとろく斗身にそしむかゝるあらしは秋もふかねは（2159）

058 ねやのうへにこの葉まかはぬ時雨ともかせのたえまそきゝわかれける（2160）

059 ふきはらふあらしのゝちのたかねより木の葉くもらぬ月やいつらん（2161）

校異　くもらぬ　くもらて

060 神無月梢にすさむ風のをとをまちけるものは庭の紅葉ゝ（2162）

校異　まちける　待とる

061 ふるさとのあさちかはらの霜のうへによはにふみわけたれとゝふへき（2163）

校異　うへに　上を

校異　たれとゝふへき　誰か問へき

062 ともちとりよさの浦かせよやさむきなみまにしるきあかつきのこゑ（2164）

校異　しるき　しきる

063 かたしきのしもよの袖におもふかなつらゝのとこのをしのけ衣（2165）

校異　け衣　独りね

064 庭のおもに木の葉をうつむ雪のうへにかさねてすめるよはの月かな（2166）

校異　おもに木の葉を　おもの木のはゝ

065 ちりしける花をはけてもかよひけりゆきにそまよふしかの山こゑ（2167）

校異　花をはけても　花は分ても

066 雪の色は庭しろたえにかはらねとやとらぬ月に袖そさえとる（2168）

校異　さえとる　さえぬる

067 あまのはらおなし空より降雪にひかりをわくる冬の夜のつき（2169）

068 雪つもるをとはの山はをとたえてしのひにかよふ松のしたかせ（2170）

069 かよひこし山ちはゆきにうつもれてけふりそたえぬをのゝすみかま（2171）

070 かくしつゝふりゆく身こそかなしけれとしはくれてもたちかへるなり（2172）
校異　ふりゆく　ふけ行

恋

071 いはぬまはこゝろひとつにさはかれてけふりもなみもむねにこそたて（2173）
072 世中はかくこそありけれとおもひけん心しらるゝおきのうはかせ（2174）
073 つれもなき人の心はいは木にてあふことかたき恋もするかな（2175）
074 つらかりし心は今もうつゝにてあふとみえしはゆめかとそ思（2176）
075 わすれ草おふるのきはを□□□□□むなしき露そかたみなりける（2177）
校異　□□□□□　なかむれは
076 うつりかはうすくなり行衣手になみたはかりそふかくそめける（2178）
077 はかなくそこんよまてともたのめけるけふめのまへにかはるこゝろに（2179）
校異　たのめける　たのみける
校異　こゝろに　心を
078 伊勢のうみのなみのよる〳〵人まつとくるしきものはあまのたくなは（2180）
079 物おもへはなかむるかけもかはりけり月やあらぬとわれをみるらん（2181）
080 人こゝろかれ野にのこるこひ草のすゑはの露のかかりける身は（2182）
校異　身は　みを

旅

081 ゆすゑもまたしら露の草枕いつをまてともえこそたのめね（2183）
校異　旅　羈旅
校異　ゆすゑも　ゆく末も
082 いはかねの枕におつるまつかせにゆめちたえぬるさよの中山（2184）
校異　まつかせに　松風の
083 よはの月われのみをくる山ちそとなれし宮この友につけこせ（2185）
校異　まつかせに　松風の
084 行ゑなきうらちをしへよあまを舟こきゆくあとはかへるしら波（2186）
校異　あとは　跡に
085 しらさりしやそせの波をわけすきてかたしくものは伊勢のはまをき（2187）

山家

086 おもはしなかゝる人めをつらしともさひしかれとてしめしいほりを（2188）
校異　いほりを　いほりそ
087 すみなれは雲もあらしもうとからしなに山さとに友おもふらん（2189）
088 たつねきて見るもかなしきすまひかなかさなるやまのおくのかよひち（2190）
089 まれにこしおほろのさとに住なれて老そしみつのあるしなりける（2191）
090 ひとゝせのみやこの人のそらたのめおもひはてぬる冬のやまさと（2192）
校異　はてぬる　たえぬる

鳥

091 うれしさのみにしむわかの浦かせに袖にそつゝむつるのけ衣（2193）
校異　浦かせに　浦風を
092 わかやとのそのゝくれ竹きりこめてねくらもとむるむらすゝめかな（2194）
093 よはのとこしくれてすくるあとにまたしきたついほの暁の夢（2195）
094 いつかたを哀とかおもふとりのねよわかるゝとこといそくせきちと（2196）
校異　せきちと　関路を
095 おほつかな宮こにすまぬ宮こ鳥ことゝふ人にいかゝこたえし（2197）

祝

096 神かせやみもすそ川のそこすみてなかれひさしき君か御代かな（2198）
校異　すみて　みえて
097 君か代はいくちとせともいはし水なかれそめけむすゑをくみつゝ（2199）
098 ちはやふる神にもとはん君が代をうれしといかにみたらしの水（2200）

099 ゆくすゑをみかさの山の松かせにをとにもしるし君かよろつよ（2201）
校異　松かせに　松の風の
校異　よろつよ　御代かな
100 君が代にひきくらふれはすみよしのまつもおよはぬ心ちこそすれ（2202）

○藤原俊成

詠百首和哥

沙弥釋阿

春廿首

001 よろつよのはしめの春としるきかなはこやの山のあけかたの空（1104）
002 かすみたつよもの山へをみわたせははるはみやこのものにそ有ける（1105）
003 春のくるつかゐのためやうくひすのあをき色にはなりはしめけむ（1106）
004 たまはゝきはつねの松にとりそへてきみをそいはふしつのこやまて（1107）
005 かすゝにはるのわかなにいのりをけはなをよろつよを君そつむへき（1108）
校異　かすゝに　春日野の
校異　なをよろつよを　やをよろつ代も
006 さはらひはいまはをりにやなりぬらんたるみのこほりいはそゝくなり（1109）
校異　をりにや　をりにも
007 むめの花さきぬるときはをしなへてはるのそらさへにほふなりけり（1110）
008 昔よりいかにちきりて梅のはないろにゝほひをかさねそめけん（1111）
009 さほひめの春のすかたやこれならんなつかしくもある玉柳かな（1112）
010 春雨のしつかにそゝくけしきにてあまねき御代は空にみえけり（1113）
011 うれしくもわか君か代のはるにあひてかせしつかなる花をみるかな（1114）

012 雲やたつかすみやまかふ山さくらはなより外も花とみゆらん（1115）
013 名にたかきよし野ゝ山の花よりや雲さくらをまかへそめけむ（1116）
校異　花　春
014 玉しきやかせしつかなるはなのした心もちらぬものにそ有ける（1117）
校異　した　もと
015 花ははる春は花をやおもふらんときも草木もちきりしあれは（1119）
016 しら川のむかしはまつそおもひいつるうれしき春の花をみるにも（1118）
017 君が世はゐての山ふき咲そひてちよをかさぬるたにみつのかけ（1120）
校異　たに　玉
018 いとゝいかに日よしの神もまもるらんはるのみ空のゝとかなるよを（1121）
019 むらさきの雲となみとそつらなれる花とはわかすたこの浦ふち（1122）
020 いくかへり春のわかれをおもひきぬみとりのそらもあはれとはみよ（1123）
校異　わかれをおもひきぬ　わかれもおしみきぬ

夏十五首

021 よそに。（本ノマヽ）心もすゝしなつくれはおほ宮人のせみのはころも（1124）
校異　よそに。（本ノマヽ）よそに見る
022 ゆふつくひひかりをそへてうの花のなこりこえたる玉川のさと（1125）
校異　ゆふつくひ　夕月夜
校異　花のなこり　花の名より
023 いにしへをおもひよそへてしのふれは花たちはなやわれをまつらん（1126）
024 ほとゝきすまつ夕くれのむら雨はきかぬさきにそ袖ぬらしつゝ（1127）
校異　きかぬさきにそ　きなかぬさきに
校異　ぬらしつゝ　ぬらしけり
025 なつかしきこゑをとゝめはほとゝきすさ月の玉にむすひそへまし（1128）
校異　そへまし　かへまし
026 行かたをおもひそおくるほとゝきすみむろの山のあけほのゝ空（1129）

027 みたやもりそともの池に水みちてかきねあきなるさみたれのそら（1130）
校異　水みちてかきねあきなる　水こえてかねて秋ある
028 五月雨はいつみのそまのたみなれや宮木人水のくたすなりけり（1131）
校異　宮木人　宮木は
029 かゝりさすよ川のたなは打はへてのちせもしらぬうかひふねかな（1132）
校異　かゝりさす　かゝりさし
030 いくよかもは山かつゆにしほるらむともしになるゝしつのますらを（1133）
031 すゝしやとうきねの池に袖ぬれてひしとりすさみくらすころかな（1134）
校異　うきねの池　うきぬの池
032 神代より君をもかみとまもりをけはこほりも夏のものとこそなれ（1136）
033 あふさかはせきのしみつにせかれつゝすきもやられぬすきの下みち（1135）
校異　すきも　過そ
校異　下みち　した陰
034 なる神もこゑおさめたるいなつまのひかりはかりそゆふたちのそら（1137）
校異　おさめたる　おさめたり
035 あさの葉のことのもとゝそみそきするあらふる神はあらしとおもへは（1138）
校異　あさの葉の　麻のえや

秋二十首

036 ふしみ山松のかけよりみわたせはあくるたのもに秋かせそふく（1139）
037 たなはたのあふせをちかくおもふより秋は心のそらになるかな（1140）
校異　秋は　秋の
038 みか月の野原の露にやとることあきのひかりのはしめなりけれ（1141）
039 秋になるのへのけしきのあはれをもまつしるものはおきのうはかせ（1142）
040 たとふへきかたこそなけれかすか野ゝはきとしかとをなれてみる
041 秋（1143）
をみなへしにほふさかりの萩か花うつる心をわきそかねぬる（1144）
校異　かねぬる　かねつる
042 たかためのたまくらにせむさをしかのいる野ゝすゝきほにいてにけり（1145）
043 秋野ゝは心もしのにみたれつゝこけの袖にも花やうつらん（1146）
044 かすならぬうき身となにゝおもひけんおほくの秋の月はみけるを（1147）
校異　かすならぬ　かすならす
045 さらぬたに月みるほとはなくさめんこゝろはれたる秋も有けり（1148）
校異　なくさめん　なくさめし
046 きゝをきしあかしの浦の秋の月みるはかきりそなをなかりけり（1149）
校異　なかりけり　なかりける
047 秋のよの月を見るこそこの世にもこんよもそらもひかりなりけれ（1150）
048 秋の夜は雲もこゝろのあれはこそ月のあたりはとをさかりけれ（1151）
校異　とをさかりけれ　とをさかるらめ
049 うれしさそ猶かきりなき君か世に和哥のうらちの月をみつこと（1152）
校異　みつこと　見ること
050 秋ことのときをたかへすくるかりはよゝにつかふるこゝろあるらし（1153）
校異　秋ことの　秋ことに
051 たのめをく人やありけん浪かせにころもうつなりまつかうらしま（1154）
校異　ありけん　あるらん
052 さえまさる秋のころもをうちわひて人まつむしのこゑよはるなり（1155）
校異　まつむしの　まつむしも
053 とませ川もみちにをとすいかたしはにしきをなみにたゝむなりけり（1156）
校異　とませ川　となせ川
054 秋のくれとへかし人の山さとをかりたのはらにうつらなくなり（1157）
055 かへる秋あらしの山をゆくならはなをふきかへせみねのもみちは（1158）

冬

056 ふゆきぬといはたのをのゝはゝそはらいろそめそふるしくれふるなり（1159）

057 この葉ちり霜さえまさるあさちはら心ほそさのすみかなりけり（1160）

校異　あさちはら　あさちふは

058 おしねほす山田の冬になりてこそおさまれるよのほとは見えけれ（1161）

校異　山田の冬　山田も冬

059 千代ふへき山路の菊のうつりきてみかきの庭ににほひそへける（1162）

校異　千代ふへき　ちよふてふ

校異　そへける　そへけり

060 神な月しくれてわたるむら雲にこゝろはそらに袖はしほれぬ（1163）

061 外山なるまさきのかつら色つけはよし野ゝふゆのおくそしらるゝ（1164）

校異　ふゆのおく　おくの冬

062 冬きてそとふへかりける深山へはしはおりみちもあられ玉しく（1165）

校異　しはおりみち　しはおるみち

063 すみかまの煙はかりを人めにてはつ雪ふりぬおほ原のさと（1166）

064 ゆきふかき山のはいつるふゆの月心ことはもをよはさりけり（1167）

065 かめやまやおほうち山をみわたせはふたをにみてりとよのゆきかも（1168）

校異　みてり　みちぬ

066 うれしくそたつねとふなる友千とりおひのねさめの有明のそら（1169）

067 夜をのこすさひしきやとはうつみ火のあたりはかりのたのみなりける（1170）

校異　夜をのこす　よはのこす

068 あしかもの入えのとこはこほりとちはかひのしもやはらひわふらん（1171）

校異　しもや　霜は

校異　わふらん　かぬらん

069 雪のうちにほとけの御名をとなふれはきく人もみなつみそ消えける（1172）

校異　消えける　消ぬる

070 舟ちより行としきかはとしのくれまつらの山に袖もふらまし（1173）

校異　行としきかは　行ともしらは

恋

071 こひ衣いかにそめけるいろなれはおもへはやかてうつるこゝろそ（1174）

072 さしも草さしもしのひの中ならはおもひありともいはまし物を（1175）

校異　しのひの中　しのひぬ中

073 いかるかのよるかのいけのよるへにもいひたにとをせおもふ心を（1176）

074 かくしもはちきりなれはそ思ふらんたゝかさねてよをしの毛衣（1177）

校異　なれはそ　あれはそ

075 ひとりねになりにしつけの枕さへかはすこよひはあはれなりけり（1178）

校異　なりにし　なれにし

076 ちきりあへすあけ行とこにさらにねておくるわかれをゆめになさんや（1179）

校異　おくる　かへる

校異　なさんや　なさはや

077 まくらたにしるなるものをかはしおきてなそしも人のつれなかるらん（1180）

078 君をのみたちてもねてもおもふかなかりちのいけのとりならなくに（1181）

079 われは是いはうついその枕なれやつれなきこひにくたけのみする（1182）

校異　枕　浪

080 恨てもなにゝかはせんあはてのみこしのみつうみ見るめなけれは（1183）

羈旅

081 かり初の袖もなみこすすまの浦にもしほたれけんむかしをそ思ふ（1184）

校異　思ふ　しる

082 みやこ路はとをからねともくさ枕しかのはまやもなみはかけゝり（1185）

校異　はまや　はやま

083 かりそめとおもふ旅ねのさゝのいほによるやなからんつゆのをきそふ（1188）
校異　おもふ旅ねの　おもひなせとも
校異　さゝのいほに　篠のいほも
校異　よるやなからん　よやなかゝ覧

084 たひ衣しほれぬみちはなけれともなを露ふかしさやの中山（1186）
校異　さや　さよ

085 旅のみちしのふのおくもしらるれと心そかよふちかのしほかま（1187）

山家

086 心あらん人のとへかしむめのはなかすみにかほるはるの山さと（1189）

087 なつきてそすむへきりける山里はうの花かきねほとゝきすなく（1190）

088 おもふにはなをまさりけりおく山の松のあらしにしかのなく秋（1191）

089 みるほとは花と月ともいかゝあらん雪ふりしけるふゆの山さと（1192）

090 身のうきはいとふ人こそつねなるをあはれなりける松のをとかな（1193）

鳥

091 たくみとり
なには人あしのあをはやほさてたくみとりにかすむ夕けふりかな（1194）

092 みやまつくみ
やまとちをたえすかよひしおくのみやまつくみて見んゐての玉水（1198）
校異　おくの　おりの
校異　まつくみて見ん　まつくみ見けん

093 かはらすゝめ
おほさはのいけのけしきはふり行とかはらすゝめる秋の月かな（1195）

094 はやふさ
うらみかねたえにしとこはむかしはやふさすなりにき夜はのさむしろ（1196）

095 しらふのたか
山さとはあきをまつかせことしらふの田かるしつは千代うたふなり（1197）

096 祝
君が代はあまてる神にまかすれはそらにちとせはかねてみえけり（1199）

097 よろつ代はちよをかさねてやはた山きみをまほらん名にこそ有けれ（1200）
校異　よろつ代は　よろつ代に
校異　まほらん　まもらん

098 いくよろつ君をまもらんきの国やみつの山にもちよをそへつゝ（1201）
校異　まもらん　めくまん

099 君か代はかもの山かせしつかにてみたらしかはゝちたひすむへし（1202）

100 しきしまやみちをはことにすみよしのまつもうれしとちよをふるらん（1203）
校異　ふるらん　そふらし

○生蓮

詠百首和歌

沙弥生蓮

春廿首

001 いつしかと□□□□□□□過にけりあさつまやまのけさはかすめる（1704）
校異　□□□□□□□　春はこれより
校異　あさつまやま　あさまの山

002 をとは山いかてかはるの越つらん人もかよはぬ岩のかけみち（1705）
校異　岩のかけみち　岩陰の道

003 姫小まつあまたのちよを引つれときみかやとにもうつしつるかな（1706）
校異　引つれと　引つれて

004 雲をたにいとひて人のなかめけるいこまのたかねかすみへたてつ（1707）
校異　なかめける　なかめけり
校異　いこまのたかね　いこまたかねは

005 たちそむる霞はそれと見えねともおなしこすゑの遠さかりゆく（1708）

006 うくひすは外面の竹に降ゆきをはなねくらにおもひたかふな（1709）
校異　はなねくらに　花のねくらに
007 しつのめかかたみのそこはむなしくておひぬわかなに日かすをそつむ（1710）
008 人なみにみつたのこせり摘ほとはおもはぬ袖のぬれにける哉（1711）
009 かた山の木かけは雪のきえやらてのこるくまき春の夜の月（1712）
校異　のこるくまき　残るくまなき
010 幾さとの人のこゝろも誘ふらん花よりつたふはるのやまかせ（1722）
校異　こゝろも　心を
011 梅かえを吹くるかせのするなれやものなつかしき春のあけほの（1713）
012 数ならて賤かゝきねに消残るゆきやわかみのためしなるらん（1714）
013 梓ゆみともやたはさみ諸ひとのをのかひきくいとふなるかな（1715）
校異　いとふ　いとむ
014 なさけなき人や宮こにとまるらんはなのさかりそしかの山越（1716）
校異　さかりそ　盛の
015 年毎に花はさけとも人しれぬわか身ひとつそ春なかりける（1717）
016 今は我すみかとすへきよし野山はなゆへに社入初しけれ（1718）
校異　入初しけれ　入はしめけれ
017 はる雨にくさたつ庭のけしきかなおほゆるものを秋の夕くれ（1719）
校異　けしきかな　けしきより
018 信濃路やすかのあら野にはむ駒はいはつそまさるねかふ人なみ（1720）
校異　いはつそ　いはへそ
019 校異　ねかふ　まかふ
ますら男かかなてのするにいくしたてみなくちまつる程はきにけり（1721）
校異　かなてのする　うなての道
020 かはつ啼きしの山吹開にけりいろをかへたるゑてのうきくさ（1723）
校異　開にけり　散にけり

夏十五首

021 たちかへるこれやう月のしらかさねあさのころもは時もわかぬに（1724）
校異　たちかへる　たちかふる
022 色くの花ならねともときくれはをりめつらしき夏木たちかな（1725）
023 心にはかけてそ思ふあふひくさかさすとよそに見えぬ斗そ（1726）
校異　そ思ふ　こそ思ふ
024 うへたてる籬の中のしけりあひてはつかにみゆるふかみくさ哉（1727）
025 時鳥いまやきなくと起ゐつゝまつこと有と人にみえぬる（1728）
026 五月雨にみをつくしとそ成にけるふるかはのへの二本の杉（1729）
027 見わたせはするせきわくるたかせかはひとつになりぬ五月雨の比（1730）
028 さみたれのひましなけれは夏引の手くりのいとにたちそひにけり（1731）
校異　いとにたちそひにけり　糸もほしそわつらふ
029 かしこきはなにはのこともおほかれとたかつの宮のひむろをそ思（1734）
030 山川のいはもととよむせみのこゑこするもやかてひゝきあひけり（1735）
031 ゆふたちの過ぬる雲に成ぬれはこゝろよりこそはれはしめけれ（1736）
校異　過ぬる　すき行
校異　成ぬれは　成ぬるは
032 てらすしてなをした露の残るまて分入くさのしけりぬる哉（1737）
校異　てらすして　てらす日に
033 校異　残るまて　残るまも
夏ころも袂すゝしく風ふきてほたるみたるゝ夕やみの空（1732）
校異　風ふきて　かせふきて
034 ひまもなく軒を双ふる山賤の住ゐをわかつゆふかほの花（1738）
035 やとことのそとものかひの煙さへたみのかまとにたちそひにけり（1733）
校異　やとことの　やとことの

秋二十首

036 何となくあはれ秋にもなりぬるとおもひもあへすよとこ寒しろ（1739）
校異　なりぬると　成ぬなと
校異　おもひもあへす　思ひあへすも
校異　寒しろ　さむしも

037 吹風もそのことゝなく身にしむはこゝろにあきのたつにや有らん（1740）
038 銀河たえぬちきりのわたりにやはねをかはせるかさゝきのはし（1741）
039 ひこほしは又こむとしの今日までをなかきよすから契をくらむ（1742）
040 真はきはらあさたつ鹿のむね分にかせをもまたてちらすへしやは（1743）
校異　またて　またす
041 高円の野への秋はき分行はおきなさひにもわたる袖かな（1744）
校異　わたる　にたる
042 うつしても栽ましものを女郎花おひをいとはぬはなとしりせは（1745）
校異　しりせは　きゝせは
043 秋風にたえぬこゝろもあるものをわきてみたるゝかやかしたおれ（1746）
044 かせ渡るおきの葉そよく是や此物わひしかる秋のゆふくれ（1747）
校異　おきの葉　萩のは
045 めつらしや朝霧かくれきこゆなり外面の小田をはつかりのこゑ（1748）
046 時きぬとかりや啼らん野へみれはほころひにけり萩の初花（1749）
047 夕されは秋たのほたちうちそよきしかそわけよるみ山辺のさと（1750）
校異　ほたち　ほなみ
048 たとり行きそのかけちの程はかりしはしははれよ秋のゆふ霧（1751）
049 くさ結ふ露のまくらにいつなれて月をさへまたやとすなるらん（1752）
050 むら雲のたえまの月に雁啼ておきの葉そよく在明の空（1753）
051 夜舩こく阠广のせきやの月影にまつすむものは□□□□□□□（1754）
校異　□□□□□□□　かこのよひ声
052 くれぬとも秋のゝへにははなを見むさてこそむしのこゑもきゝけれ（1755）
053 あきといへは物を思はぬね覚まてこゑうらめしきき〻すかな（1756）
054 うへたてしかとたのいねもかりはてゝ風たに今は音つれもせす（1757）
055 くれてゆく秋をも空にみせかほにひかりともしき有明の月（1758）
冬十五首
056 眺やるをちの山へのむら雲のはるれはこゝにしくれ降なり（1759）
057 きく人もなくて時雨や過ぬらんかり田のいほに雲そかゝれる（1760）

058 なかめこし四方の木の葉も散果て松にあらしの音残るなり（1761）
059 いつしかも冬のけしきに成にけりあさふむ庭のをとのさやけさ（1762）
校異　さやけさ　さやけき
060 あさな〻しもをく庭の草むらののこるみとりも見えす成ゆく（1763）
061 ふく風に霰降しくくすのはゝちりてのゝちも玉そまきける（1764）
校異　まきける　さきける
062 ね覚してきけはおれ伏呉竹にこのしたゆきのほとそしらるゝ（1765）
校異　このしたゆきの　よのまの雪の
063 あたこ山しきみかはらに雪ふれははなに花をもそへてつむかな（1766）
064 跡絶るゆきにみ山はなりにけりさとなれそむる鳥のこゑ〻（1767）
065 干瀉ふく余佐の浦なみたかゝらしみきはのちとりつれてたつなり（1768）
校異　つれて　むれて
066 さゆるよのほそたに川の忘れ水したゆく水の音もいつまて（1769）
校異　忘れ水　うす氷
067 きゝすすむ枯のかくれのかひなくてくさかるたかのをときこゆ也（1770）
校異　かひなくて　かひもなく
068 池水の汀にゐたるあちむらにくたけてみゆるうす氷かな（1771）
校異　ゐたる　おつる
069 賤の男かをのかわたらひいとなくてすみつみ車雪きしるなり（1772）
校異　いとなくて　いとなみて
070 見わたせは軒のしのふにたるひしてふゝきにこもるおほはらのさと（1773）
校異　ふゝきに　ふかきに
恋十首
071 わか心いかなるいろに出ぬらんまた見ぬ人をおもひそめつゝ（1774）
072 心あてに人やしるらんたくひなくつゝむ思ひの身にあまる哉（1775）
073 人こゝろうきも我みのとかそともおもふにすきてつらき君かな（1776）
074 なけくともよそにもつきし物思の涙ににたる袖のうへかな（1777）

校異　なけくとも　なけくとて

075 校異　つきし　ときし
つらさをも恨はかりの身なりせはたゝひとかたに袖はぬらさし（1778）

076 命にもあひみんことをかふへきにうき身はたれもつゝましきかな（1779）
校異　あひみん　あひ見る
校異　うき身はたれも　うき身にそれも

077 あちきなや恋しなんみをおほかたのおひゆくはても人やおもはむ（1780）
校異　はても　はてと

078 思ひきや有しそのよの俤のたちゐにつらくならむ物とは（1781）
校異　つらく　つよく

079 数ならてうき心にもいかにして人のつらさを思ひしるらん（1782）
校異　数ならて　数ならぬ

080 あひ見ての有増ことをせし中にたゝひとよとは思はさりしを（1783）

山家

081 よそにてはさひしくみえし山里をかくても人はすめとすみけり（1789）
校異　すめと（本ノマヽ）　すめは

082 春といへといつらは人の問きけるこすゑのはなもぬしによりけり（1790）

083 はつかりのおしねとりほし今はゝやにへするほとになれるやま里（1791）

084 なかめやる煙はかりやこのさとのたゝむとなりのしるへなるらん（1792）
校異　たゝむ　たのむ

085 しはしこそたへぬ心もおほえけれきゝなれにけり峯の嵐も（1793）
校異　たへぬ　たのむ

羈旅

086 秋かせの日かすやつもる旅ころもたもとさむくも成まさる哉（1784）

087 わひつゝも衣かたしきいほさきのすみたかはらに今夜あかさむ（1785）
校異　あかさむ　あかしつ

088 けふも猶おきのなたろのたかけれはかせそふね路のとまり成ける（1786）
校異　なたろの（本ノマヽ）　名残の

089 てる月の満ゆくしほにうきねしてたひの日かすそ思やらるゝ（1787）
校異　思やらるゝ　空にしらるゝ

090 東路やゆきゝにあへる旅人はまつふるさとをとひかはす哉（1788）

鳥五首

091 よろつよのみつはよつはの殿つくりかねてもしるきたくみとり哉（1794）

092 おほとりのはかひの山にふる霜をたれにつけよといそくみとさき（1795）
校異　つけよ（本ノマヽ）　つけよ

093 かほとりは人にもいたく見えしとやくさかくれつゝ鳴わたるらん（1796）

094 百敷やすみかさためよ火焼とりなれはやとりもことにみゆめり（1797）
校異　百敷や　もゝしきに
校異　なれは　なれか
校異　ことにみゆめり　よはに見えけり

095 夕されはまかきの竹のむらすゝめこれをも友とたのむなりけり（1798）
校異　友と　友に

祝

096 君か代はなかすのたきに年をへてちとせかさぬる鶴の毛衣（1799）
校異　たきに　里に

097 きみかよはあたにもえこそいはし水たえぬなかれを神にまかせて（1802）
校異　きみかよは　君か代を
校異　あたにも　あたには

098 うなはらや由良のみさきにたつ波のかすかきりなき君か御代かな（1803）

099 あまつちのさかへますへき君か世をつたへてきくもうれしかりけり（1800）
校異　つたへてきくもうれしかりけり　つたへき国もうれしからすや

100 きみか世は老せぬかとをたて置てめくる月日も長閑かりけり（1801）
校異　めくる　過る

○寂蓮

詠百首和歌

沙弥寂蓮

春二十首

001 あくるより空にけしきのしるきかなかすみやはるのさきにたつらん（1604）

002 いつしかと谷のとほその明かたに霞そめたるうくひすのこゑ（1605）

003 雪ふかきまとをへたつる梅かえのさきぬるかたに鶯のこゑ（1606）

校異　かたに　かたや

004 淡路しまかよふしるへに立けふりかすみにまかふ須磨の曙（1607）

005 春もなを雪ふるさとはわかな摘あとよりこそは野へのかよひ路（1608）

校異　あとより　今朝より

006 はる風にいけの氷はとゝまらてうきねのかもそなを残ける（1609）

007 あを柳のなひく梢の色そそふかせにまかせて見るへかりけり（1610）

校異　色そそふ　色のみそ

校異　へかりけり　へかりける

008 夕霞入日のかけにたつたやまはるのこすゑも色かはりけり（1611）

009 しら雲のかさなる峯にたつねつるはなは都の木すゑなりけり（1612）

校異　はなは　花の

校異　都の木すゑ　都はふもと

010 山のはもあたりに遠き宮古にそ雲にまかひて花はみるへき（1613）

校異　まかひて　まかはて

011 春のいろをひとつもめてあまの川雲のなみ（みなと）とやみよしのゝ山（1614）

校異　ひとつもめて　ひとつにこめて

校異　なみとや　みなとや

012 やまふかく心すむへきいほりかな花ゆへならぬ（て）かゝらましかは（1615）

校異　ならぬ（て）　なれて

013 たつねつる木のした風に雪散てはな故はるもわすられにけり（1616）

014 やへしけるむくらのやとはをのつからにはまてちらぬ花も有けり（1617）

校異　やと　かど

015 恨わひ庭にもかゝるなみたかな花ちるさとのこゝろよはさは（1618）

校異　庭　空

校異　かゝるなみた　かへるなかめ

016 霞しく野へのけしきはあさみとりそめこそやらね春雨の空（1619）

017 越路にはまたふる雪も有物をそなたのそらにきゆるかりかね（1620）

018 春ふかきゐてのたひねの帰さは袖よりそちるやまふきの花（1621）

019 うくひすのふるすにとめし郭公かへらはさそへ雲にいるこゑ（1622）

020 しかのうらやけふたちかへる春風にこほらぬなみも遠さかるなり（1623）

校異　遠さかるなり　遠さかりけり

夏十五首

021 今はとて山ほとゝきすまつかえにはるもかゝれる池の藤なみ（1624）

022 われも行人もかよひてうの花のかきねのうちそ隔さりける（1625）

校異　かきねのうちそ隔さりける　垣根そなかはへたてなりける

023 雲まなきさ月の空も卯の花のかきねにはるゝ玉川のさと（1626）

校異　雲　はれ

024 ふるきよの夢よりほかに郭公こゝろそさむる明かたのこゑ（1627）

校異　こゑ　そら

025 なにしおはゝおひその杜の杜鵑おなしこゑこそきかまほしけれ（1628）

校異　こゑこそ　ことこそ

026 軒ちかき盧橘のにほひきてねぬよのゆめはむかし成けり（1629）

027 さみたれやあやめのすゑにつたふらん遠さかるなり軒の玉水（1630）

028 しほみたぬ真のゝ浜（ちへ）のさゆりはも入ぬるいそは五月雨のころ（1631）

校異　浜（ちへ）の　浜路の

029 おりたては濁るやまたのほともなくすむとみゆるは早苗なりけり（1632）

030 とこ夏のあたりは風も長閑にてちりかふものはてふのいろ〳〵（1633）

031 ゆふたちのはれゆく空の雲間よりくもりあへける夜はの月かな（1634）

校異　くもりあへける　思ひあへなる

032 山かつのけふり斗とをくかひのうへにもゆるは蛍なりけり（1635）

033 きえやらぬなこりのみかは氷室山まつにそ冬のかせはふきける（1636）
校異　ふきける　吹なる
034 なつのよのいはもる水にすむ月は袖より結ふこほりなりけり（1637）
035 みそきする河せのなみも秋風をへたつるほとはせみのはころも（1638）

秋二十首

036 夏もなをなこりはおしきうたゝねの枕のにしに秋のはつかせ（1639）
037 たなはたの物思ふ袖や天の河もみちのはしをしくれそめけん（1640）
038 よそにきく峰のあらしも荻のはにさとなれそむる夕くれの空（1641）
039 むら雨はのきのしのふに露をちてまつかせ（けぶ）にゐる日くらしのこゑ（1642）
校異　まつかせ（けぶ）　松かせ
040 宮城のゝはきのあさつゆ打はらひはなそみたるゝしのふもちすり（1643）
校異　はなそ　花に
041 物思ふ袖より露やならひけむあきかせふけは絶ぬものとは（1644）
042 うつし栽しこ萩かもとの秋のゝになりはてねとは思はさりしを（1645）
043 都よりいくよのくさをむすひてもつきをおもはゝをはすての山（1646）
044 名残なくあかしの浦に雲きえて月にそやとる沖つ白浪（1647）
045 物毎に秋のあはれは残りけりきりのまかきに澄る夜の月（1648）
校異　あはれは残りけり　あはれものこるなり
046 山ふしのほらふく峯のゆふ霧にそこともしらぬすゝのうはかせ（1649）
047 さと人の山かせいとふからころもうつをとしもそ夜寒成ける（1650）
048 雲につく峰のいほりの寝覚してたゝこゝもとにはつかりのこゑ（1651）
校異　いほりの　庵に
049 年もへぬあさちかはらの虫の音にむすほゝれたるやとゝ見るかな（1652）
校異　見るかな　みなから
050 きりくす間をかへにをとつれてよるのあめふる庭のはせ（本ノマヽ）うは（1653）
校異　間をかへに　まちかきかへに
051 校異　はせ（本ノマヽ）うは　はせをは
052 野分せしをのゝくさふし荒はてゝみやまにふかきさをしかのこゑ（1654）
龍田山しくるゝまゝに松の葉も紅葉にいろのかはるなりけり（1655）

053 紅葉ゝのころもにおつる名残社袖よりしたは時雨なりけれ（1656）
054 かり残すやまたのそほつ心なきそてたにぬるゝ秋のゆふへを（1657）
校異　ゆふへを　ゆふくれ
055 野辺はみな思ひしよりも裏枯て雲間にほそき在明の月（1658）
校異　ほそき　遅き

冬十五首

056 千々におもふ秋のなこりや冬のよのねさめならはすはしめなるらん（1659）
057 浅茅はらむしのねさへも故里のしくれに残るゆふきりのそら（1660）
校異　さへも　までも
058 見し秋もやかてやくれんうす氷もみちをむすふ山のゐのみつ（1661）
校異　やかてやくれん　あかてやくれし
059 秋のうちは梢はかりと見し程に今はあらしもゝみちしにけり（1662）
060 雪ふらはみちもたえなん山さとをしくるゝまてはとふ人もかな（1663）
061 こからしの誘はぬ松の音までもまきの板やに降こゝちして（1664）
062 さひしさはおもひやるたに有物をまさ木のかつら霰ふるなり（1665）
063 山さとはとなりの竹のすゑのみそゆきのあしたにしほれきにける（1666）
064 あとたゆる山ちの雪をあはれともこゝろはかりそ我をとひける（1667）
065 東路の雪のあしたはしら波のしたよりわたるすまの（本ノマヽ）ふなはし（1668）
校異　すまの（本ノマヽ）　さのゝ
066 早き瀬はむすひもやらて山川のさゝれしたひにこほりしにけり（1669）
校異　したひに　つたひに
067 さよちとりあかしのせとの浦風に島かくれゆくこゑきこゆなり（1670）
068 きよみかた雪ふる空に鳴千鳥いはにをとせぬ浪やかくらん（1671）
校異　かくらん　立らん
069 山かけにともたつぬともをし鳥のいはまにやとる月にのりつゝ（1672）
校異　ともたつぬとも　友たえぬとや
070 いにしへのはるまてしのふ心かなむかへんかたは一夜はかりを（1673）
校異　かたは　ことも

校異　はかりを　はかりに

恋十首

071 身をつめははるまつ梅のいか斗いろにもいてぬ物おもふらむ（1674）

校異　梅　花

072 ひきかけし神のちかひを頼かな身こそ浮田の杜の七五三なは（1675）

073 うきをしる袖のしくれは音もせてあきのよふかき寝覚をそする（1676）

校異　しくれは　しつくは

074 袖のうへは千枝にも露やかさぬらんしのたの森の秋のしたくさ（1677）

075 人しれぬむねの煙やしきたへの枕のしたのあまのいさり火（1678）

校異　煙や　煙を

076 なみた川しはしおさへんかたそなきよしのゝたきはせきとゝむとも（1679）

077 水鳥の玉ものとこのうきねかはなみよせかけぬ時のまそなき（1680）

078 身のうさを思ふ涙もかはらねはうらみぬ袖とたれか見るへき（1681）

校異　かはらねは　かはらねと

079 恨みしなあきの夕へは今そ是それにもとはぬこゝろつよさは（1682）

080 在明になるまてよはの月をみはこぬ人をこそ待へかりけれ（1683）

山家

081 やまさとはみねを軒はに住なしてまとよりいつる有明の月（1689）

校異　やまさとはみねを軒はに　山のはを軒の梢に

082 今はたゝ雲のやへたつおくにてもあたりをとはむ山ひともかな（1690）

083 嵐ふく峯のこのみをひろふまに袖にもみちそ先たまりける（1691）

校異　たまりける　つもりける

084 住人のかよはぬほかはあともなしにはよりおくの渓のした路（1692）

校異　した路　細みち

085 すみ侘てなを山ふかく跡絶はたれをかこゝに松たてるかと（1693）

羈旅

086 都思ふすまのせきやのうたゝねにいそたちのほる夕浪のこゑ（1684）

087 さと人によるのやとゝふあつまやの軒には月のまつやとりぬる（1685）

校異　さと人に　里人の

校異　軒には　軒はに

校異　やとりぬる　やとりける

088 主しらぬ旅ねのあとのくさ枕なれけむそての露はとゝめて（1686）

089 里近く山路のすゑは成にけり野飼のうしの子を思ふすゑ（1687）

校異　思ふすゑ（こ歟）　思ふ声

090 浦ちかきやまちのすゑに日は暮てふもとのいほにあまの漁火（1688）

校異　あまの漁火　あまのもしほ火

鳥五首

091 ひとはねに千さとをかける鳥も猶ゆたかにとをしゆくすゑの空（1694）

092 めにみえぬとりもよにふる身のほとはかのまつ毛にもすはつくるなり（1695）

093 ともすれはゆきのみ山に啼とりのおもひさためぬ身のゆくゑのみ（1696）

校異　ゆくゑのみ　ゆくゑかな

094 哀ともいはゝやいはむ言の葉をかへすあふむのおなし心に（1697）

095 百敷やきくのこすゑにすむ鳥のちとせは竹の色もかはらす（1698）

校異　きくの　桐の

校異　かはらす（しイ）　かはらす

祝

096 よろつよのすゑはるかなるけしきかなはこやの山の春の明ほの（1699）

097 みな人の心もすゝしいはし水ひかりをきみか袖にまかへて（1700）

校異　まかへて　まかせて

098 四の海の波のほかまて空はれてかせものとかにすめる月かな（1701）

校異　四の海の　四の海

099 や千よとも限らし物をとも千鳥むれゐるいそのをのかゝすゝ〳〵（1702）

校異　をのかゝすゝ〳〵　をのかこゑ〳〵

100 君が代は八雲の空のはしめよりよむとも盡し和哥の浦浪（1703）

（注）

(1) 式子内親王の翻刻は、原豊二「池田光政ほか筆『射山百首和謌』（林原美術館蔵）について」（『山陰研究』九号、二〇一六年一二月）ですでに翻刻しているが、誤りを訂正し、新たに書陵部本との校異を付して今回再掲した。

(2) 但し、讃岐の034・035は、書陵部本を底本とする『新編国歌大観』では、034・035の順に訂正して番号を付している。

(3) この歌は書陵部本を始めとする諸本が持たない歌である。

〔付記〕本稿を執筆するにあたり、資料使用の許可をいただきました林原美術館に感謝申し上げます。